

Title	＜翻訳＞断魂の槍
Author(s)	老, 舎; 杉村, 博文
Citation	大阪外国語大学論集. 10 p.161-p.172
Issue Date	1994-03-18
oaire:version	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/79626">https://hdl.handle.net/11094/79626</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## 断 魂 の 槍

老 舎 著  
杉 村 博 文 訳

沙子龍の用心棒社はすでに旅籠に姿を変えていた。<sup>(1)</sup>

東方の太平楽な夢は否応もなく打ち破られた。砲声がマレーとインドのジャングルの虎の咆哮を押し去った。寝ぼけ眼の人々は眠い眼をこすりながら、ご先祖様と神様にご加護をお願いしたが、さしたる時間も経たぬ間に、国土と自由と主権を失った。戸口には皮膚の色の違う人間が立っている。銃口はまだ熱かった。彼らの長い槍、毒矢の大弓、蛇紋鮮やかな厚い盾、それが何の役に立とう。ご先祖様も、ご先祖様が崇めてきた神々も、すべて靈驗あらたかではなくなったのだ。龍旗の中国もすでに神秘的ではなくなった。蒸気機関車が走りだしたのだ。それは墳墓を突っ切って走り、風水を侵した。<sup>(2)</sup> 幾つも房をつけた棗色の用心棒社の旗、鮫皮の緑色の鞘におさまった青竜刀、数珠つなぎの鈴を響かせて歩く塞外の馬、<sup>(3)</sup> 渡世の知恵と隠語、義侠心と名声、そして沙子龍でさえ、彼の武芸も、事業も、すべて夢のように昨日のものとなった。今は蒸気機関車と連発銃と通商とテロの時代である。聞くところによると、皇帝の首を狙っている者までいるらしい。

遠出や輸送の用心棒がすでに飯の喰いあげとなり、国技がまだ革命党と教育家に提唱されていなかった時代のことである。

沙子龍が瘦身短軀、機敏強靱で、二つの眼は霜降る夜のきらめく星のようであったことを知らない者がいようか。しかし今、彼の体には肉がついた。用心棒社は旅籠となり、彼自身は奥の小院の北棟三間に陣取り、<sup>(4)</sup> 槍は部屋の隅に立ててある。中庭には家鳩が数羽いる。ただ夜にだけ、彼は奥の小院の中庭の入口をしっかりと閉め、彼の「五虎断魂の槍」に少しの間親しむのであった。<sup>(5)</sup> この槍とこの技は、二十年の間に、西北一帯において「神槍沙子龍」の名を響きわたらせ、向かうところ敵なしであった。今、この槍とこの技が彼のために再び榮譽を勝ち取ってくれるということはない。ただ、ひんやりとし、滑らかで、硬くて、そして打ち顛える槍身に触れると、心中の悲しみが少し安らぐというだけのことである。真夜中に一人で槍を手にとった時にのみ、彼は自分が今でも「神槍の沙」であることが信じられるのである。昼間は、彼は武芸と往事をあまり話そうとしなかった。彼の世界はすでに狂風によって何処かに吹き飛ばされてしまったのである。

彼のもとで腕を磨いた少年たちは今でもよく彼を訪ねてくる。<sup>(6)</sup> 彼らの大半は決まった収入がなかった。皆それなりの武芸を身につけていたが、使い道がなかった。寺廟の縁日に出向いて大

道芸を演ずる者がいた。足蹴りをして二度三度ぐりと回り、得物を取り技を一式演じ、<sup>(7)</sup> 幾つかトンボ返りをして、ついでに大力丸を売り、<sup>(8)</sup> 少しばかりの銭を手に入れるのである。中には金がなくて遊んでいることができなくなり、果物を一籠工面して来たり、少しばかりの枝豆を担いで、朝早く通りに出、大声を張り上げ量売りをする者もいた。当時は、米も肉も安く、力の出し惜しみさえしなければ腹を膨らませることはできた。彼らはしかしそれでは駄目だった。彼らは人よりもたくさん、そして腹持ちのよいものを食べなければならなかったのである。肉気油気のない粗末な食事は喉を通らなかった。<sup>(9)</sup> いわんや彼らはなおしばしば縁日に出向き武芸を奉納しなければならなかった。五虎棒、露払い、親子獅子……、荒野の用心棒に比べればどうという事はないとは言え、<sup>(10)</sup> それでも人前に出て晴れがましい舞台に立てることに違いはなかった。そう、縁日で武芸を奉納し喝采を浴びることは晴れがましいことなのである。彼らはそれなりに恥ずかしくない服装をしなければならなかった。最低でも黒の縮緬のズボン、新しい天竺木綿の単の肌着と刺しこ縫い魚鱗靴——できれば黒の緞子の抓地虎筒靴——が欲しい。<sup>(11)</sup>

彼らは神槍沙子龍の弟子であり（沙子龍は決して認めようとはしなかったが）、ほうぼうに顔を出さないわけにはいかなかった。しかし縁日で武芸を奉納するには多少は身銭を切らなければならないし、ひょっとすると喧嘩の一つもしなければならなかった。弟子たちは、金がなければ沙先生のところに言って無心をする。沙先生は気前がよく、多少に関わらず彼らを手ぶらで帰すことはなかった。しかし、喧嘩あるいは武芸の奉納のために技を教えてもらいに行ったり、「組合せ」（例えば「徒手対真剣」とか「槍対虎頭鉤」など）を教えてもらいに行ったりすると、沙先生は冗談を言ってごまかしてしまうことがあった。<sup>(12)</sup>

「何を教えろって？へその茶の沸かし方でも教えてやろうか。」<sup>(13)</sup>

時には有無を言わず追い返した。弟子たちは沙先生がどうなってしまったのかが理解できず、心中多少不満でもあった。

しかし、彼らはあちらこちらで沙先生の為に吹聴して回った。一つには彼らの武芸が由緒正しく、名人の教導を受けたものであることを人々に知って欲しいがためであり、一つには沙先生を焚きつけんがためである。もし誰か承服できない者が現れ、沙先生を目指してやって来れば、沙先生とて一つや二つ奥義を披露しないわけにはいくまい、というわけである。そこで、

「沙先生は拳一発で牛を殴り倒した！」

「沙先生は造作もなく一蹴りで相手を屋根まで蹴り上げた！」

彼らは誰もこんなことを目撃してはいない。しかし吹聴している内に、彼らはそれが真実であると信じるようになった。「何時」も加わり、「何処」も加わった。本当の本当！誓ってもよい！

王三勝——沙子龍の使用人頭である——は土地廟で芸を売る場所を設け、得物を並べた。<sup>(14)</sup> 褐色のかぎ煙草をたぷりと鼻に塗り付けると、ブルンブルンと九節鞭を打ち振り、<sup>(15)</sup> 見物人を後退させて場所を少し広げた。九節鞭を下に置くと、回りの見物人に揖（ユウ）の礼もせず、両手を腰に当て口上を唸った。<sup>(16)</sup>

「足は天下の好漢を蹴散らし、拳は五道の英雄を打ち倒す！」<sup>(17)</sup>

王三勝はぐるっと回りに視線を走らせ、続けた。

「御当地の皆様、わたくし王三勝は芸を売る者ではございません。腕に多少の覚えがあり、西北道にて用心棒を勤め、緑林の友人達と手合わせをしたこともございます。今日は暇でやる事もなく、この場を拝借し、皆様の暇つぶしのお相手をさせていただこうという所存でございます。武芸の鍛練のお好きな方、どうかご遠慮なく、王三勝は武を以て友と会します。私の顔を立てて下さいます方、お相手させていただきます。神槍沙子龍は私の師匠、腕は本物です。皆様、我と思わん方はおられませんか？」

王三勝は見物人を眺めた。挑んでくる度胸のある者がいないことは分かっていた。彼の話は脅しがきいていた、さっきの九節鞭はなおのこと脅しがきいていた。2.4貫もあるのだ。

王三勝は大きな体に、おそろしい顔つき。大きく黒い目の玉をひんむいて回りを眺めた。声をあげる者はいなかった。彼は単の上着を脱ぎ、灰青色の「力帯」をギュッと締め、腹を引き締めた。<sup>(18)</sup> 手の平に一つ唾をくれ、大刀を手にとった。<sup>(19)</sup>

「皆様、王三勝が先に一式ご披露いたします。ただでは致しません。終わりましたら、お持ちの方は何枚か投げて頂きたい。銭がなければ『いいぞ』の一つも叫び、ご声援をお願いしたい。私の申すことに商売気はありません。<sup>(20)</sup> では、ご覧あれ！」

大刀は体に添い、眼球は大きく跳び出し、顔は固く引き締まり、胸の筋肉は古い樺の木の根のように盛り上がった。グイッと足を踏みしめるや、大刀は水平に伸び、大きな赤い房が肩の前で揺れた。<sup>(21)</sup> 大刀を小さく鋭く切り降ろす、大きく袈裟に斬る、真っ向から振り下ろす、左右に払う；身を沈める、躍らせる、翻らせる、旋回させる。大刀の及ぶところ風生じ、ビュビュッと唸りを上げた。突然、大刀が右の掌の上で旋回し、体は曲がり沈んだ。見物人は水を打ったように静まりかえり、大刀の房に付いた鈴だけが微かに鳴った。大刀が刀身を上に体に添うと、グイッと一つ力足を踏んだ。体はすっとと聳え、回りの者たちより頭一つ上に出て、黒い塔のように見えた。王三勝は構えを収めて言った。

「皆様！」

一方の手に大刀を持ち、一方の手を腰に当て、回りに視線を走らせた。バラバラと銅銭が幾つか投げ込まれた。王三勝は頷き、再び言った。

「皆様！」

彼は待った、待ってみた。足元は先ほど投げられた、きらきらと薄い数枚の銅銭のままであった。外側の見物人はこっそりと去っていった。彼を怒りを飲み下した。

「誰も分かっちゃいねえ！」

王三勝は小さな声で言った、しかし皆の耳に聞こえた。

「なかなかやるじゃないか！」

右斜め前方から黄茶けた髭の爺さんが答えた。<sup>(22)</sup>

「ン？」

王三勝は言葉の意味が理解できなかったように見えた。

「お前さん……なかなか……やるじゃないか、と言ったんだよ」

爺さんの口ぶりは大いに人を小馬鹿にしたところがあった。王三勝は大刀を地面に置き、皆の頭につき随って右斜め前方を見た。その爺さんを相手にする者は誰もいなかった。小柄で干からびた体、紺色の粗い木綿の膝下までの単の上着を羽織り、顔は皺に包まれ、目は深く落ち窪み、口の回りには黄茶けた細い髭が疎らに生え、肩にはみすばらしい枯草のような辮髪を載せている。辮髪は箸のように細かったが、箸のようにしゃきっと真っ直ぐであるとは到底言えなかった。しかし王三勝はこの老いぼれがただ者ではないことを見抜いた。額は輝き、目も輝いていた。眼窩は落ち窪んでいたが、両の目は黒く二つの小さな井戸のようで、深いところで黒い光を放っていた。王三勝は恐れはしなかった。彼は人の腕の善し悪しを見抜くことができたが、それ以上に自分の力を信じていた。彼は沙子龍の高弟なのだ。

「こちらに来て遊んでいきませんか、ご老人！」<sup>(23)</sup>

王三勝の言葉遣いは礼儀に適っていた。頷いて、老人は中央に進んだ。それを見て回りは皆笑い声を上げた。老人の腕は余り動かず、左足が一步前に進むと、右足はそれにつれて引き上げられ、一步一步前に引っ張られるのである。体はぎくしゃくとしており、中風を病んだことがあるようだった。<sup>(24)</sup> 足を引きずり引きずり中央まで来ると、老人は上着を地面に投げ捨て、見物人が彼をどう笑おうがまったく意に介さなかった。

「神槍沙子龍の弟子、と言ったな？ よし、お前さんに槍を使わせてやろう。わしは……」

老人は躊躇するところが一切なかった。長い間、腕がむずむずしていたようだった。見物の人々が皆引き返してきた。隣の熊の曲芸師がいかに銅鑼を打ち鳴らそうと無駄であった。

「槍対三截棍でどうですか？」<sup>(25)</sup>

王三勝は爺さんの腕前を見てみたかった、三截棍はおいそれと手にできる代物ではない。老人はまた頷き、三截棍を取り上げた。王三勝は目を怒らせ、槍を顫わせた。顔色はたいへん悪かった。

爺さんの黒い眼は更に深く更に小さくなり、二つの線香の火が眼前の槍の穂先につれて動いているように見えた。王三勝は急に気分が悪くなった、その二つの黒い眼が槍の穂先を吸い込んで行きそうに感じたのだ。回りには幾重にも人垣ができ、皆は爺さんに確かな威圧を感じていた。爺さんの眼を避けようと、王三勝は槍を大きく一つ回した。<sup>(26)</sup> 爺さんの黄茶けた髭が動いた。

「やって来い！」

王三勝は槍をグイッと押さえると、低い姿勢で踏み込んだ。<sup>(27)</sup> 槍の穂先は爺さんの喉仏めがけて走り、槍身の房は赤い円を描いた。<sup>(28)</sup> 老人の体が突然伸びやかになった。軽く体を反らせて槍の穂先をやり過ぎすと、三截棍の一截で槍を掛け止め、一截で王三勝の手を下から払った。<sup>(29)</sup> パシ！パシ！二撃、王三勝の槍は手を離れた。見物人は喝采した。王三勝は顔から胸まで真っ赤

になり、<sup>(30)</sup> 落ちた槍をひったくった。槍が大きく一回転すると、槍と体が一体となって転がってきた。槍の穂先は老人の腹部を指した。爺さんの目は輝き黒い光を放っていた。膝を軽く曲げると、下からの一撃で腹部を守り、上からの一撃は引こうとする槍身を打ちすえた。<sup>(31)</sup> パシ！槍はまたも地に落ちた。

見物人は再び大喝采した。王三勝は汗を垂らし、再び槍を拾おうとはしなかった。大きく目を剥いて、茫然とその場に立ちつくしていた。爺さんは三截棍を投げ捨てると、上着を拾い上げ、相変わらず足を引きずっていたが、歩く速度は随分増していた。上着を腕に掛け、爺さんは歩み寄り、王三勝の肩を軽く叩いて言った。

「まだ修行が足りんな、相棒！」

「待て！」

王三勝は汗を拭きながら言った。

「お前さん、なかなか大したものだ、俺様は兜を脱ぐ。だが、一つ聞く。お前さん、沙先生と手合わせをする度胸があるか？」

「沙子龍に会うためにやって来たのだよ！」

爺さんの干からびた顔に皺が浮かんた。どうやら笑っているようだ。

「行こう！片づけんか、晩飯はわしがおごろう！」

王三勝は商売道具を一か所に集め、手品師のあばたの二郎のところに預け、爺さんについて土地廟の外へ向かった。後ろから多くの野次馬がついて来たが、王三勝は怒鳴り声を挙げて追っ払った。

「ご老人、お名前は？」

王三勝は尋ねた。

「孫だ。」

爺さんの言葉は体つきと同様に無愛想だった。

「武芸が好きでな。随分前から沙子龍と手合わせしたいと思っていた。」

沙子龍はお前など一ひねりだ、くそったれが！王三勝は腹の中で罵った。王三勝は足元に力を加えた、しかし爺さんに置いてきぼりを食わずすることはできなかった。爺さんがずっと查拳の連跳歩で歩いているのを王三勝は見抜いた。<sup>(32)</sup> 対戦すればきつとたいへん素早いに違いない。しかし、爺さんがいかに素早かろうと、沙子龍に敵はいないのだ。孫爺さんが馬鹿を見ることは確かだった。王三勝は少し気分が晴れ、足元の速度をちょっと緩めた。

「孫先生、お国は？」

「河間のもんだ、田舎だよ。」<sup>(33)</sup>

孫老人も少し穏やかになった。「棒三月、刀三年、槍一生。ちょっとやそこらで上達するもんじゃない。実際、さっきのお前さんの槍、なかなかのもんだったぞ！」

王三勝の額にまた汗が戻ってきた。言葉はなかった。

旅籠に着くと、王三勝は胸がしきりと高鳴った。沙先生がいなかったらどうするか、彼は仇討ちを急いでいた。彼は沙先生がこういう事にかかずらうのが嫌いであることを知っていた。弟子達はすでに何度も断られている。しかし、今日はきっと大丈夫だと彼は信じていた。彼は使用人頭なのだ、あいつらひよっ子とは違う。それに、相手は縁日において名指しで手合わせを要求したのだ、それでもなお面子を失うようなまねが沙先生にできるだろうか。

「三勝、」

沙子龍はちょうど横になって『封神榜』を読んでいた。<sup>(34)</sup>

「なにか用か？」

王三勝の顔がまた真っ赤になった。唇は動くが、言葉が出て来ない。沙子龍は起き上がり、尋ねた。

「どうしたんだ？三勝。」

「転びました！」

大して長くない欠伸を一つただけで、沙先生は何も反応を示さなかった。王三勝は心中不満であったが、怒りをぶちまけるだけの度胸はなかった。彼は師匠を焚きつけなければならなかった。

「孫という爺さんが外で先生を待っております。槍を、私の槍を、二度も叩き落としたのです。」

彼は「槍」という言葉が師匠にとってどれほどの重みをもつものか分かっていた。言いつけを待たず、彼は大急ぎで飛び出していった。

客が入って来た。沙子龍は表の間に出て待っていた。互いに拱手の礼を交わし腰を下ろしたのち、沙子龍は三勝に茶の支度を命じた。三勝は二人の老人が即刻手合わせすることを望んだが、茶の支度に行かないわけにはいかなかった。孫老人に話すべきことはなく、深く隠した目で沙子龍を観察した。沙子龍は畏まって言った。

「もし三勝があなたに無礼をはたらいたということなら、相手になさらんで下さい、まだ若いのです。」

孫老人はいささか失望した、しかし同時に沙子龍の頭のよさが分かった。彼はどうしたらよいか分からなかった。頭のよさで人の武芸を推し量ることもできない。

「槍の使い方を教えていただきに参上しました！」

彼は思わず口にした。沙子龍は応じなかった。王三勝が急須をさげて入って来た。二人が立ち合うところを見たくて気が焦り、湯が沸いたかどうか確かめず、そのまま急須に注いだのだった。

「三勝、」

沙子龍は湯飲みを手にとって言った。

「順たちを捜しに行きなさい。『天匯』で会おう。孫先生のお相手をして飯を食うのだ。」<sup>(35)</sup>

「なんですって？」

王三勝の目の玉はもう少しで飛び出すところだった。沙先生の顔を見て、王三勝は怒りはできても口にはできずといった体で、一声「分かりました！」と言い残し出ていったが、大きく口を尖らせていた。

「弟子を仕込むのは難しい！」

孫老人が言った。

「私は弟子を取ったことはありません。参りましょうか、この茶はぬるい！茶館に行って飲みましょう。茶を飲んで腹が空けば飯にしましょう。」<sup>(36)</sup>

沙子龍は机の上から緞子の袋巾着を取り上げ、一方にかぎ煙草の壺を入れ、一方に金を少しばかり入れ、腰帯に掛けた。<sup>(37)</sup>

「いや、私はまだ腹は空いておりません！」

孫老人は断固として言った。二つの「否」は細い辮髪を肩から背中へと振りやった。<sup>(38)</sup>

「ちょっと話でもどうですか。」

「私は槍の使い方を教えていただく為に参上したのです。」

「修業はとうの昔に止めました。」沙子龍は体を指して言った。「もう肉がついてしまった。」

「こうしても良い、」

孫老人は沙子龍をしっかりと見据えて言った。

「立ち合いはしない代わりに、あなたの五虎断魂の槍を私に教えて欲しい。」

「五虎断魂の槍？」

沙子龍は笑った。

「とうの昔にきれいさっぱりと忘れてしまいました、とうの昔に。わしの所に二三日泊まっていきなさい、あちこち案内致しましょう。帰りには、多少なりと路銀をお渡しいたします。」

「私は物見遊山に来たのではない！銭も必要ない！私は芸を学びに来たのだ！」

孫老人は立ち上がった。

「私の腕をご覧にいれる、芸を学ぶに足るだけのものかどうか見ていただきたい。」

腰をかがめたかと思うと、孫老人はもう中庭にいた。驚いた家鳩が一羽残らず飛び立った。構えを取ると、老人は查拳を演じた。足の運びは素早く、手は軽やかに舞った。大きく地を蹴ると、辮髪は宙に漂い、中空から風が舞い降りてきたように見えた。どの動作も素早さの中に安定感があり、精確で、切れ味鋭かった。行き来すること六度、中庭を残さず巡った。動きは滑らかで、技に切れ目なく、身は一所に在って、気は四方を貫いていた。拳を抱いて構えを収めると、老人の体は小さく縮んだ。あたかも庭中飛び交っていた燕が突然巢に帰ったように。

「お見事！お見事！」

沙子龍は戸口の石段の上に立ち、頷きながら叫んだ。<sup>(39)</sup>

「私に五虎断魂の槍を教えて欲しい！」

孫老人は拳を抱いた。<sup>(40)</sup> 沙子龍は石段を降り、同じく拳を抱いて答えた。



「孫先生、正直に言いましょう。あの槍とあの技は私と共に棺桶に入ります。連れ立って棺桶に入ります。」

「伝授しないと？」

「いかにも！」

孫老人の髭の口が暫く動いた。言葉は何も出てこなかった。家に入り、紺色の木綿の上着をひつたくと、足を引きずりながら言った。

「お邪魔した！後日！」

「飯を食って行きなさい。」

沙子龍が言った。孫老人は黙っていた。沙子龍は客人を奥の小院の入口まで見送ると、家の中に戻り、部屋の隅に立っている槍に向かって頷いた。<sup>(41)</sup>

沙子龍は一人で『天匯』に出向いた。王三勝たちを待たせてはいけないと心配したのだが、彼らの姿はなかった。

王三勝や順たちはそれ以後再び縁日に出向いて芸を売る勇氣はなく、誰も再び沙子龍のために武勇を吹聴することもなかった。逆に、彼らは言った。「沙子龍は転んだ、どこかの爺さんと手合わせする度胸さえない。その爺さんは一蹴りで牛を蹴り殺すことができる。王三勝が負かされたことはさておき、沙子龍でさえその爺さんの敵ではない。しかしだ、王三勝はともかくも爺さんと勝負をした、ところが沙子龍は骨のある言葉一つ口にする度胸がなかった。」

神槍沙子龍は次第に、どうやら人々に忘れられていった。

夜も更け人々が寝静まったころ、沙子龍は奥の小院の中庭の入口をしっかりと閉め、一気に六十四の型からなる槍を突き終えた。そして、槍を杖に天上の星ぼしを眺めやり、かつての西北の荒野における武勇を思い起こしていた。ため息をつき、ひんやりと滑らかな槍身をゆっくりと撫でると、また微かに微笑んだ。

「伝授はしない！伝授はしない！」

平成4年11月6日訳完

\*九二年の秋、三人の四回生と輪読会をもち、この作品（原題『断魂槍』、原載1935年9月22日『大公報』）を読んだ。その際、一番新しい邦訳（1981年刊）を参考までにとめくってみて驚いた。実にひどい訳で、日本における現代中国研究の底の浅さを嫌というほど思い知らされた。私がこの翻訳を決意した経緯である。『断魂槍』は1955年すでに邦訳が出されているが、それは見えていない。この訳稿は文法に偏った語学専攻者による『断魂槍』の翻訳である。文学的な完成はもとより、歴史や風俗の考証にも万全を期してはいない。目指したものは文法的な読み間違いをしないということのみである。なお本訳は『老舍短編小説選』（人民文学出版社。1956年10月初版、1981年2月第6刷、北京）にもとづいている。

\*老舍に関しては、『老舍珠玉』や『老舍事典』など、たいへん立派な参考書があるので蛇足を

避けた。『断魂槍』発表時、老舎36歳、国立山東大学国文系教授の職に在った。

＊大修館書店編集部の黒崎昌行氏から「おぼろげな記憶だったのですが、大学の頃ラジオで黎波先生の『断魂槍』を聞いたことがあるような気がして探しましたところ、83年12月から84年3月まで、やはり放送しておりました」という添え書きと共に、NHKラジオ講座テキストのコピーが送られてきた。(平成4年11月18日) 83年12月2日に始まり翌年3月31日に終わっている。実に丁寧な訳注と誠に味わい深い訳文で構成された素晴らしいテキストである。今、黎波先生の訳を前に蛇足、献醜を恐れず敢えて拙訳を発表するが、それは黎波先生の訳文が現在入手しにくいこと、また拙訳が直訳を旨としており、今後何らかの意味で教材・資料として役立つことを願ったことである。以下の訳注において【 】で括った箇所は黎波先生の注釈を引用させて頂いたものである。

## 訳 注

- (1) 「用心棒社」の原文は〈鑢局〉。武芸の心得のある者を雇い、旅人や貨物の護衛運輸を請け負う組織のこと、【北中国で清初から清末かけて活躍した】。〈鑢〉は〈鏢〉とも書く、槍の穂先に似た投擲用の武器である。
- (2) 「龍旗の中国」は〈龍旗の中國〉の直訳である。〈龍旗〉とは黄色の地に龍の図柄をあしらった清国旗〈黄龍旗〉を言う。中国最初の鉄道はイギリスが上海に敷設した淞滬路(清・同治13年、1874年)であるが、二年後(清・光緒2年、1876年)、清朝政府はこの鉄道を買収して撤去し台湾の打狗湖に棄てた。風水を破壊するというのが最大の理由であったという。
- (3) 「塞外の馬」の原文は〈口馬〉で〈張家口外の馬匹〉(張家口の外で産した馬)というのが原意である。張家口は「中国河北省北西部の都市。万里の長城の関門にあり、内蒙古との物産交流地。蒙古名カルガン」。(『広辞苑』)
- (4) 「彼自身は奥の小院の北棟三間に陣取り」の原文は〈他自己在後小院占着三間北房〉である。〈後小院〉は北京の伝統住宅である〈四合院〉の〈大門〉(正面)から二つ目の〈院子〉(中庭)を囲む小さな〈四合院〉のことであろう。【〈北房〉からは開口部分が南を向き、陽当りのよい好ましい部屋というニュアンスが感じ取れる】。『北京風俗図譜1』の写真(居処第三の1住宅全景)および解説(11頁-116頁)を参照。  
 槍の柄は【河北、河南、山東に産する白蠟樹という弾力に富む木でできている。白い木肌で木目が細かく、よくしなるので、減多に折れない。(槍は)直立して手を真上に挙げた時の指先までの長さ】。
- (5) 「五虎断魂の槍」の原文は〈五虎断魂槍〉。このような槍術が実際に存在したかどうかは分らない。〈断魂〉は【古典語の〈銷魂〉と同義語。あまりの哀しみ、愁いで、魂が体から脱けるの意。《断魂槍》には、魂をもたき出すほどの凄絶な槍術を言う一方、この題は「悲しき槍」とも解せる。】
- (6) 「腕を磨いた」の原文は〈創練〉。この単語は〈闊練〉とも書き、「上声+轻声」で発音する。意味は「現実の生活の中で才覚を伸ばし、自立する能力を身につける」である。
- (7) 「足蹴りをして二度三度ぐるりと回り」の原文は〈踢兩趟腿〉、〈趟〉が往復を表す助数詞なのでこう訳してみた。「得物を取り技を一式演じ」の原文は〈練套家伙〉である。〈套〉を「一式」と訳したが、〈套〉は〈套路〉の意味をもち、ここでは「構えを取ってから収めるまでの一連の技」を教える助数詞である。
- (8) 「大力丸」は原文も〈大力丸〉、【薬草を調合してつくった丸薬。直径三センチくらいの大きさ。昔、縁日あるいは大道で武芸の妙技を披露したあと、「これ一粒で百人力」という口上で売られた】。〈百補増

力丸」と呼ばれるものもあった。武芸を演練し「大力丸」を宣伝する場合、上半身裸になり堂々たる体軀を見せつけるのが常であったようだ。『北京民間風俗百圖』の22〈耍叉圖〉、76〈耍双石頭圖〉を参照。現在〈大力丸〉という単語はまがいものの薬の代名詞として使われている。

- (9) 「肉気油気のない粗末な食事」の原文は〈干饅饅辣餅子〉で、「粗末な食事」を言うが、〈辣餅子〉単独では〈剩下的隔夜乾糧〉(残った宵越しの〈乾糧〉〔穀類で作った日持ちする食べ物〕)を表す。
- (10) 「縁日に出向き武芸を献納する」の原文は〈走会〉で、【武芸者が団体を組み、廟会の際に他流と一同に会し、得意の技を披露し合う会合に出席すること】を言う。「五虎棒、露払い、親子獅子」の原文は〈五虎棍、開路、太獅少獅〉。〈五虎棍〉は【〈走会〉のときの雑技の一つ。扮装した五人の男が行う棒踊り】。
- (11) 「黒の縮緬のズボン、新しい天竺木綿の単の肌着、刺しこ縫い魚鱗靴」と「黒の緞子の抓地虎筒靴」の原文はそれぞれ〈青洋縐褲子、新漂泊細市布の小褂、和一双魚鱗洒鞋〉と〈青緞子抓地虎靴子〉である。〈鞋〉は踝までの短靴を指す。〈洒鞋〉(〈靸鞋〉)は足を入れる口を小さくし、脱げにくいようにした布靴で、带状の革や三角巾で強化してある。〈靴子〉はブーツである。〈抓地虎靴子〉は〈快靴〉(乗馬用の靴)の一種で、筒部が普通の〈靴子〉に比べ少し短く、素早い動きに適する。衣類に関しては『北京風俗図譜1』の写真(四-7衣服裙帯)および解説(136-138頁)を参照。靴に関しては『北京風俗図譜2』の写真(八-14武芸)および解説(127-130頁)、『北京民間風俗百圖』の22〈耍叉圖〉、76〈耍双石頭圖〉を参照。
- (12) 「『組合せ』を教えてもらう」の原文は〈請給説個‘對子’〉であるが、この訳は苦しいかも知れない。〈對子〉は【両者がきまりにもとづいてやる武術のこと。徒手対徒手、徒手対武器、武器対武器の合わせ方がある。〈對練〉ともいう】。「徒手対真剣」と「槍対虎頭鉤」の原文はそれぞれ〈空手奪刀〉(徒手で刀を奪う)と〈虎頭鉤進槍〉(虎頭鉤に槍で挑む)。もし〈虎頭鉤破槍〉となっていれば「虎頭鉤で槍と争う」となろう。〈虎頭鉤〉は剣の先が手前に向かって鉤状に曲がった武器で、柄の部分には〈護手〉と呼ばれる、握る手を守ると同時に反撃にも使える外に向かって反った三日月形の刃が付いている。『兵器圖例』(9頁)、『北京風俗図譜2』(45頁、127頁の写真)を参照。
- (13) 「何を教えろって?へその茶の沸かし方でも教えてやろうか」の原文は〈教什麼?拿開水澆吧!〉〈教〉(教える)と〈澆〉(水をかける)が同音である。直訳すれば、「何を教える?湯を教えて(かけて)やろうか」となる。因みに黎波先生の訳文では「なにをゆ(言)えばいい?尼の髪でもゆ(結)おうか!」となっている。
- (14) 「土地廟」は原文も〈土地廟〉。〈土地廟〉は〈土地堂〉とも言い、その地域の神(〈土地〉、〈土地爺〉あるいは〈土地老〉)を祀る所であるが、北京の〈土地廟〉は宣武門外土地廟斜街(旧槐樹斜街)にある。「北京の縁日は毎日のようにどこかで開かれている。九、十、一、二の日は隆福寺で、三の日は土地廟で、五、六の日は白塔寺で、七、八の日は護国寺で開かれる。そのうえ正月の初一日の東獄廟、初二日の財神廟、十七、十八日の白雲觀、三月三日の蟠桃宮は北京の名物である。」(『北京風俗図譜2』、38頁)この解説に欠けている四の日は「花兒市」で縁日が開かれた。
- (15) 「九節鞭」の原文は〈竹節鋼鞭〉。竹の節に似た突起がたくさんある鉄製の武器で、形状は鏢のない竹刀に似ている。中国の武芸十八般における〈鞭〉は鉄製で有節無刃の武器を言う。『兵器圖例』(9頁)を参照。
- (16) 「回りの見物人に揖(ユウ)の礼もせず」の原文は〈没向四圍作揖〉である。〈作揖〉は「右手を上左手を下にして、拳を軽く握りながら上身をかがめ、膝がしらまで垂れた両手の拳を顔の高さに上げてから、下にさげて放す。上身をかがめずに、拳を胸のあたりで止めてから、上下に二、三回動かすのは拱手といい、作揖はどていねいではない」。(『北京風俗図譜1』、103頁)
- (17) 「五道」は原文では〈五路〉である。〈五路〉は実際に北京から各地に延びる五つの街道を指していると考えられることも可能であるが、ここでは東西南北中の各路、即ち「全国」を表す「虚」な表現であると考えたほうがよい。
- (18) 「単の上着」の原文は〈小褂〉。〈小褂〉は【中国風の上衣。シャツの役割を持つ。男物は対襟式。】

- 「灰青色の『力帯』」の原文は〈深月白色的‘腰裏硬’〉。〈腰裏硬〉は【幅の広い堅織の板帯。革のもある】。『北京民間風俗百圖』の22〈耍叉圖〉、76〈耍双石頭圖〉を参照。
- (19) 「大刀」（〈大刀〉）は槍のように長い柄をもつ刀で、刀身の背によく房が付いている。
- (20) 「私の申すことに商売気はありません」の原文は〈這兒沒生意口〉である。〈生意口〉は【能書、かけひき言葉のこと】。「わたくし王三勝は芸を売る者ではございません」を承けての言葉である。〈生意口〉は時に〈圈套〉（「わな」→「嘘偽り」）の意味でも使われる。
- (21) 中国では古来、大刀や槍には房（多く赤色）が付いている。刀身や穂先と柄の結合部に近いところに付けることが多い。
- (22) 「右斜め前方から」は原文は〈西北角上〉であるが、大道芸の見物人の位置を指定する表現として、「西北」は大袈裟すぎて使えない。しかしまた王三勝がどちらの方向を向いているか分からない以上、その前後左右は知りようがない。「右斜め前方から」という訳は一つの可能性に過ぎない。
- (23) 「ご老人」は原文では〈大叔〉となっている。〈大叔〉は「父親と同輩で、父親より年少の男子に対する敬称」であるが、ここでは「叔父さん」と訳すわけにはいかない。
- (24) 「体はぎくしゃくとして」の原文は〈身子整着〉で、「両腕を動かさず、歩く時体の動きがぎこちなく硬い」という意味を表す。〈整着臉子〉と言えは「仏頂面をしている、不機嫌で暗い表情をしている」ことになる。
- (25) 「槍対三截棍」の原文は〈三截棍進槍〉である。注12を参照。「三截棍」は三本の棒が鎖で繋がれた武器である。
- (26) 「槍を大きく一つ回した」の原文は〈耍了個槍花〉であるが、〈槍花〉は攻防の動作ではなく、相手との間合いを計るために出すフェイントの一つである。後に出てくる〈一個花子〉も〈耍了個槍花〉と同じ意味を表す。
- (27) 「低い姿勢で踏み込んだ」の原文は〈躬歩向前〉。〈躬歩〉（多く〈弓歩〉と書く）は中国の様々な武術に共通する、攻撃の際の足の運びの一つである。
- (28) 「槍身に付いた房」の原文は〈槍纓〉。注21参照。
- (29) 「三截棍の一截で槍を掛け止め、一截で王三勝の手を払った」、前後の二つの「一截」の原文は〈前把〉と〈後把〉である。〈把〉は動作を表すことも可能なので、「最初の一撃、次の一撃」のように動的に訳すべきであったかも知れない。注31参照。
- (30) 「真っ赤になり」の原文は〈紫了〉である。これは極度の恥ずかしさと怒りで顔から胸まで鬱血し暗紅色を呈した状態を言ったもので、できることなら「どす赤くなり」と訳したかった。紅葉などが真っ赤を通り越し小豆色になった状態は〈紅得發紫了〉と表現できる。
- (31) 「下からの一撃は槍を防ぎ、上からの一撃は引こうとする槍身を打ちすえた」の「下からの一撃」と「上からの一撃」の原文はそれぞれ〈下把〉と〈上把〉である。【三截棍をたてに使う場合、上になる棒を〈上把〉、下になる棒を〈下把〉という】。注28参照。
- (32) 「查拳」は明朝末期に査尚義（回族）を祖として誕生したと伝えられている。中国武術の中でも普及度は高く、華北省や山東省において特に盛んである。【この拳法は……「歩くは風の如く、立つは釘の如し」がその奥義。しなやかな反面、力強い動きと跳躍が特徴。〈查拳〉の〈查〉は、cha（陽平）と発音する場合が多い。姓の〈査〉はzha（陰平）と発音する】。〈連跳歩〉は未詳だが、字面から判断すれば、「歩いているように見えて実際は小刻みに跳んでいる」足の運びを言うと考えられる。
- (33) 「河間」は河北省にある県で、北京から真南へ約二百キロ下る。
- (34) 『封神榜』は『封神傳』、『封神演義』とも呼ばれる。明代に著された長編〈神魔小説〉で、神仙や妖怪が秘術を使って繰りひろげる戦闘が多く描かれている。作者は許仲琳であるとも、陸西星であるとも言われる。
- (35) 中山時子編『老舎事典』には老舎の作品に出てくる〈飯館〉や〈茶館〉が列挙されているが、『天匯』の名は見えない。
- (36) 「茶館」の原文は〈茶館〉、【むかし、大茶館では手のこまない料理もあきになった】。清末から民国にか

けて出現した、茶が飲めて食事もできる新式で粋な〈茶館〉は〈茶社〉と呼ばれた。〈茶社〉で供され腹の足しになる食べ物は各種の〈点心〉で、餃子、肉饅、春巻、ウイロウ、饅頭、湯麺などがあつた。鄧云郷著『魯迅與北京風土』（90-93頁）参照。

- (37) 「袋巾着」の原文は〈褡褢〉。〈褡褢〉は長方形の袋で、中央に口があり、両方がそれぞれ袋となり、金などを入れる。大小二種類あり、通常、大きいものは肩に掛け、小さいものは腰に掛ける。
- (38) 「二つの『否』」の原文は〈兩個‘不’字〉であるが、これは「いや、私はまだ腹は空いておらん！」の原文（〈不、我還不餓！〉）における二つの〈不〉による否定を指している。
- (39) 「戸口の石段」の原文は〈台階〉。北京の家屋の門の敷居は道路や中庭から石段を二三段上がったところにあるのが常である。
- (40) 「拳を抱く」の原文は〈抱拳〉。これは注16で説明した〈拱手〉の礼と同じ意味である。
- (41) 「裏の院の中庭の入口」の原文は〈小門〉である。他の理解も可能ではあるが、ここでは全文の文脈から〈後小院的門〉と解釈した。

#### 参 考 文 献

- 『北京風俗図説1』、内田道夫解説、東洋文庫23、平凡社、1964。
- 『北京風俗図説2』、内田道夫解説、東洋文庫30、平凡社、1964。
- 『老牛破車』、老舍、南國出版社、香港、1973。
- 『乙組槍術圖解』（武術基本訓練叢書之七）、藝美圖書公司、香港、1975。
- 『初級刀術圖解』（武術基本訓練叢書之二）、藝美圖書公司、香港、1977。
- 『老舍珠玉』、黎波著、大修館書店、1982。
- 『詹天佑和中國鐵路』、徐啓恒・李希泌著、上海人民出版社、1978。
- 『兵器圖例』、前召・煥宇編絵、陝西人民美術出版社、1981。
- 『魯迅與北京風土』、鄧云郷著、文史資料出版社、北京、1981。
- 『北京民間風俗百圖』（藝術文獻叢書）、書目文獻出版社、北京、1982。
- 『甲組槍術圖解』（武術基本訓練叢書之六）、藝美圖書公司、香港、1983。
- 『老舍作品中的北京話詞語例釋』、楊玉秀編著、北京大學出版社、1984。
- 『出口成章——論文學語言及其他』、老舍、人民文學出版社、北京、1984。
- 『查拳』、常振芳・張文廣編著、中國人民體育出版社・ベースボールマガジン社監訳、1985。
- 『北京方言詞典』、陳剛編著、商務印書館、北京、1985。
- 『北京話語詞匯釋』、宋孝才・馬欣華編著、北京語言學院出版社、1987。
- 『広辞苑』第三版CD-ROM版、新村出編、岩波書店、東京、1987。
- 『老舍事典』、中山時子編、大修館書店、1988。

(1993. 9. 20 受理)